

授業実践例に見る‘Weak’ CLIL の有効性

Effectiveness of ‘Weak’ CLIL—through an example of a course

梅田 礼子

Reiko UMEDA

和歌山大学クロスカル教育機構教養・協働教育部門

Abstract

In modern society, where many people have access to various information of the world with the Internet, just having English skill is not as important as it used to be in old days. What is important is to analyze the information, form an opinion, and to cooperate with other people. English education should change its aims, as the needs have changed. It is, however, difficult to keep up to the speed of the society change and change the way of teaching accordingly. One of the potential ways of changing English education is to use CLIL method. Using various modern topic material and encouraging or helping students to communicate their knowledge and views with others in English can help change EFL(English as a Foreign Language) teachers’ mindset. This article shows an example of an English course with ‘Weak’ version of CLIL and discusses how effective it was both for students and the teacher.

キーワード/Keywords: 英語教育、内容言語統合型学習、CLIL のバリエーション (強形～弱形) / English Education, CLIL(Content and Language Integrated Learning), Variation of CLIL(strong ~ weak)

1. はじめに

日本の英語教育について、2017年学習指導要領改訂で英語が小学校で教科とされるにあたり賛否様々な論があった。英語教育に関する論争は、実はここ数年のことではなく、江利川(2022)が述べているように、明治から現在まで「目的は教養か、実用か」「優先すべきは読解か、会話か」「英語学習は早く始めれば良いのか」など、さまざまな観点での論争があった。英語教育の目的すら定まっておらず、教育法も紆余曲折を重ねてきた。これまでの論争を振り返ると、訳、文法、会話と項目はさまざまでも、共通して「英語『が』できること」を目的として議論してきたようである。グローバル社会にあって、英語力、特に会話力が重要だと言われることも多いが、IT機器・翻訳機器の発達により、機械に通訳を任せることも可能となってきた中、重要なのはむ

しろ、英語を用いて「何を」話すのか、といった内容の方になってきている。また、個の確立や考える力、創造する力、他人と協働する力、なども重要となってきた。

インターネットが登場する以前は、英語力を用いて、海外から新しい情報を早く仕入れることに優位性があった。欧米の情報をいち早く仕入れれば、日本でビジネスとして成功することが出来た。現代では、インターネットを使える人なら誰でも同じ情報を手に入れることが出来るようになり、情報入手の速さ・情報の豊富さによる優位性はなくなった。

さらに、インターネットには多くの情報¹⁾があり、また、有益な情報と、誤った情報、悪意ある嘘情報も同列に混在している。その雑多な多量の情報からより良い情報を「見分ける力」が必要である。さらに、その情報を用いて何を考え、どう行動するかが大切である。

つまり、英語は「目的」ではなく、「道具」であって、英語「を」用いて、収集した情報をどのように選別し、考え、自分の意見を構築し、何を発信するか、どのように行動してゆくか、が問われる時代となっている。また、交通・情報手段の発達、ビジネスや生活様式のグローバル化により、他国の人々との交流が増えており、異文化理解も重要となっている。

このような社会背景を踏まえて、近年外国語教育の原理として「CLIL (内容言語統合型学習)」が注目されている。言語と教科内容を同時に教えることを目的としたものである。本稿では筆者が自分の担当授業において、この CLIL を一部導入した方法・結果について観察し、日本の英語教育における CLIL の有効性について考察する。

2. 先行研究 CLIL の概要および特徴

2.1 CLIL の概要

CLIL とは Content and Language Integrated Learning の略で、「内容言語統合型学習」のことである。Gabillon & Ailincăi (2015) は CLIL の大まかな特徴と、この名称の起りを次のように述べている。

(1) CLIL is an educational approach that uses a language other than the learners' L1 to teach a school subject. The term CLIL was coined by a group of language experts and researchers who participated in the bilingual/multilingual education movement prompted by the European Commission in the late 90s (see European Commission publications 1995, 2003, 2008; Eurydice Network 2006). CLIL has a dual educational focus with the aim of developing language skills and disciplinary content knowledge. (Gabillon & Ailincăi, 2015:312)

また、日本語での CLIL 導入書と呼んでよい渡部他(2011)が「基本書」として推奨している Coyle, Hood & Marsh (2010) では次のように述べている。

(2) Content and Language Integrated Learning (CLIL) is a dual-focused educational

approach in which an additional language is used for the learning and teaching of both content *and* language. That is, in the teaching and learning process, there is a focus not only on content, and not only on language. Each is interwoven, even if the emphasis is greater on one or the other at a given time. CLIL is not a new form of language education. It is not a new form of subject education. It is an innovative fusion of both. (Coyle, Hood & Marsh, 2010:1)

目標とする言語を用いて教科内容を教えるが、言語だけ、内容だけ、に重きがあるのではなく、両方を重視している、ということだ。渡部他(2011)がこれらをまとめ、さらに、CLILの目的を包括的に述べて、(英語教育における)CLILについて以下のように定義している。

(3) Content and Language Integrated Learning(CLIL)とは、教科を語学教育の方法により学ぶことによって効率的かつ深いレベルで修得し、また英語を学習手段として使うことによって実践力を伸ばす教育法のこと、学習スキルの向上も意図されている。さまざまな教育原理・技法を有機的に統合することで、高品質な授業を実現する洗練された教育法である。(渡部他、2011:12)

この定義に続けて、「『高品質な授業を実現する』ためには、授業者に『さまざまな教育原理・技法を有機的に統合する』専門性と経験が求められる」、「CLILはプロが調理した料理のようなもので、シラバス作成、教材開発、授業方法、学習の評価、などの素材を厳選して作りこむ『巧の技』が必要」(渡部他、2011:12-13、素材についての文、筆者による整理)、と述べているので、授業者にとって取り組むのが困難であるように見える。しかし、実は、渡部他(2011)がCBI(Content-based Instruction)とCLILの違いを解説した部分で、「要は、アメリカのコンテキストで生み出されたのか、ヨーロッパのニーズを満たすために生まれたのかの違いなのだが、そういった背景の差以上に重要なのは実用性である。端的に言って、CBIよりもCLILのほうが使い勝手がよい。それはひとえに『4つのC』を核とする、洗練された使いやすいフレームワークが用意されているからである」渡部他(2011:4)と述べている。この「4つのC」を核としたフレームワークに従って授業を構築してゆけば、また、教育現場の実情に合った、強弱等のバリエーションで導入すれば、CLILでの授業は難しいことではない。

2.2 CLILの特徴：「4つのC」

CLILの核となる「4つのC」について、渡部他(2011)は次のように述べている。

(4) CLILの「4つのC」

CLILのどこが画期的なのかというと、既存の要素—特に内容(Content)、言語(Communication)、思考(Cognition)、協学(Community)で構成される「4つのC」(Coyle et al. 2010:48-85)—を有機的に結び付けパッケージングした点にある。(渡部他、2011:4-5)

この、CLILの核となる「4つのC」について、渡部他(2011:6-9)による説明から基

本的な部分を取り出すと、以下のようなものである。

(5) CLIL の「4つのC」の詳細

「内容(Content)」は「新しく得られる知識、スキル、理解」のことである。

「言語」(Communication)については注意が必要で、CLILでは、語学学習よりも、対人コミュニケーションと学習ツールとしての言語使用に高い比重を置く。「3つの言語」という考えがあり、言語材料や技能を指す「学習の言語」(language of learning)、目標言語で何かを学ぶ際に必要な表現や学習スキル(例:ノートの取り方)など「学習のための言語」(language for learning)、これら2つを結びつける仕組みである「学習を通しての言語」(language through learning)を柱として、語学学習と言語使用を有機的に組み合わせて、言語習得を促進する。

思考(Cognition)には、知識の理解や暗記を中心とする、浅い、表面的な学習(shallow/surface learning)と、学んだ内容を既存の知識や経験と結び付けたり、批判的に考察を行ったりする深い学習(deep learning)がある。両者をバランスよく学習活動に取り込むため、思考を難易度により、6つの認知力(記憶、理解、応用、分析、評価、創造)に分類し、授業における活動の準備などに用いる。

協学(Community)は教室から、市町村、国、地球全体というさまざまなレベルのコミュニティを想定していて、グループワークなどは狭義のコミュニティ観に根差しており、地球温暖化など世界的問題をトピックとして扱う場合は、学習者を「地球市民」の一員とみなす、広義のコミュニティ観に基づいている。(渡部他、2011:6-9.の説明を筆者が抜粋要約)

2.3 CLIL のバリエーション

教育の多様な面を考慮して授業やコース、カリキュラムを組むとなると、多忙な教員の多い教育現場で急に全面的にCLILによる教育を導入するのは難しいだろう。しかし、渡部他(2011)が述べているように、幸い「CLILは柔軟性も特徴の一つで、『4つのC』を順守することで質の担保が行われれば、教育現場の実情に合わせたさまざまなバリエーションがあってよい」とのことである。バリエーションの観点には「目的」「頻度・回数」「比率」「使用言語」がある。渡部他(2011)がまとめたものを、表の形で挙げる。なお、soft~hard, light~heavy等の左右は対立でなく、連続体である。

(6) CLIL のバリエーション

観点	強弱	弱	～	～	強
目的		Soft CLIL 英語教育			Hard CLIL 科目教育
頻度・回数		Light CLIL 単発的／小数回			Heavy CLIL 定期的／多数回

比率	Partial CLIL 授業の一部	Total CLIL 授業の全部
使用言語	Bilingual CLIL 英語・日本語	Monolingual CLIL 英語

渡部他(2011:10)の図5を便宜的に表の形とした。また、soft~hard, light~heavy等CLILの程度の総称としての「強弱」は筆者がつけた。

例えば日本の教育機関で、英語の教師が物理学の内容（科目教育 Hard CLIL）を英語のみで（Monolingual CLIL）、半期や1年のコースのすべて（Heavy CLIL）、授業全部にわたって（Total CLIL）行うといった、Strong CLILは、実際問題として難しいだろう。しかし、他科目内容も少し入ったような教材を扱いつつ、目的としては英語教育（Soft CLIL）、単発（Light CLIL）や授業の一部（Partial CLIL）で、（教師・学習者ともに）英語だけでなく時には日本語も使いつつ行う（Bilingual CLIL）という Weak CLILであれば、実行可能なのではないだろうか。筆者は現勤務校で2022年度、一般教養英語の授業をこの Weak CLIL スタイルで行った。次節でその方法を紹介、4節で結果を述べる。

3. Weak CLIL での一般教養英語授業実践方法

3.1 コースや受講者・テキストなど

①コースや受講者

教育学部2年生対象の一般教養英語科目で、授業種類としては「総合」、レベルは中級。半期ごとの科目だが、テキストは同一のものを前期に前半、後期に後半使用とした。総合科目は英作文や英会話練習を行うことを考慮して少人数設定。本コースの受講者は前期26名、後期30名であった。

②使用したテキスト

テキストは『World English2 (Third Edition)』 Student Book with Online Workbook』, John Hughes, Becky Chase 他. National Geographic Learning (センゲージ)を使用した。(レベル2の難易度はCEFRのA2+~B1程度)

カタログでは「4技能を網羅したベストセラーの第3版。ナショナルジオグラフィックとTED Talksから最新のコンテンツを取り入れ、学習者を世界へ導きながら4技能をしっかり指導します。リアルワールドの映像や写真に触れ、斬新なアイデアに触発されて、自らも発信したいと願うようになるテキスト」と紹介されており、その通りである。

扱っている題材が食生活、健康、コミュニケーション、都市の良さと問題点、困難と挑戦、文化伝統、動物や言語の保護、環境問題、過去と現在、旅、など多岐にわたっており、学生の興味を喚起する。グローバル社会にあって、世界市民の一員として知っておきたい問題も多く扱われているため、学生にとって役立つと考えた。雑誌で有名な

National Geographic が作成しただけあって、非常に美しい写真が多く、学生の興味を引き、飽きさせないのも、このテキストの良い点である。

扱う技能も文法、語彙、リスニング、スピーキング、発音、リーディング、ライティング、ビデオ視聴、と総合的である。

ビデオ視聴はインタビュー（英語母語話者・非母語話者両方）の回と TED Talks の回とがあり、内容が良質なうえに、非母語話者による英語を聞くことも、学生にとって良い刺激となる。TED (Technology, Entertainment, Design) Conference は元、異分野交流のために始まったもので、近年多くの Talk 動画を無料で YouTube に公開している。英語学習に良いというので日本でも人気。内容も「外国語学習の方法」「人からの中傷を気にせず自分らしくある方法」など実践的なものから、生きていくうえで参考になるものまで幅広く、有益なものが多い。このビデオ視聴が入っているのも、このテキストを選んだ理由の大きな一つである。

4 技能の総合教材で、すべて英語で書かれているため、扱っている語彙や文法は、日本の大学生にとっては平易である。学生に合う 1 つ上レベルの同種テキストでは、読解文章が長い、トークの英語が速いなどバランスがやや悪い。テキストが英語で書かれていて、教師の説明や活動指示も極力英語で行う予定であったので、語彙・文法は平易となるが、レベル 2 を選んだ。結果的にはこのレベルが適切であった。

なお、詳細な教師用ガイドに加えて、授業用プレゼンツールもあり²⁾、教科書のページ画面をスクリーンに映すことができるだけでなく、音声やビデオ、解答が埋め込んであり、クリックして提示できるようになっている。学生と同じページを提示しながら説明できるので、学生にとってわかりやすい。また、教師の授業準備時間を節約でき、その分教材研究に時間と労力を使うことができ、大変便利である。

3.2 授業の概要・ねらいと到達目標

2022 年度前期のシラバスから「概要・ねらい」と「到達目標」を以下に示す。

「概要・ねらい」

- ・英語の基本的な語彙・文法を身につけ、日常の事柄について会話を聴き取ったり、会話のスキルを学びながら練習したりする。
- ・簡単な文章の読み取りや、映像の内容の把握の訓練を行う。
- ・自分の考えを基本的な英語表現・文法を用いて書く・話す等発信する訓練を行う。

「到達目標」

- ・基本的な語彙や文法、発音の知識を用いて、身の回りの事物の説明などの簡単な会話を聴き取り、概要を把握することができる。会話の簡単な受け応えができる。
- ・基礎的な短い文章を読み、概要や話の構成、キーワード等を把握し、情報を整理することができる。
- ・映像を見て、概要をなるべく日本語を介さずに把握することが出来る。
- ・身の回りの事物の説明を書く、話すなど発信することができる。

・文章や映像などの情報を整理し、自分の考えを持ち、それについて基本的なことを、英語を用いて話したり、書いたりし、人に伝えることができる。

このように、語彙・文法・発音等の理解、「インプット」は大変基本的な材料であり、理解や暗記の難易度は低い。一方、事実を整理したり、自分の考えをまとめたりして、「書く・話す（プレゼン作成も含む）」、という発信活動「アウトプット」側は、用いる語彙・文法等は基本的でも、発信することに慣れていない学生にとっては良い意味でチャレンジングであったと考える。

3.3 授業方法と成績評価方法

①授業方法：CLILのバリエーションについて

「目的」英語教育かつ、「科目」までは行かないが内容教育。内容にも興味を持ち、考え、自分の意見を持ってほしいと考えた。

「頻度・回数」すべての回。初回オリエンテーションも、授業スタイルに慣れてもらうために、極力英語で行った。（成績評価方法など重要事項は日本語でも説明した。）

「比率」授業の大半。

「使用言語」主に英語・時に日本語（Bilingual CLIL）。

授業では（教師・学習者ともに）英語だけでなく時には日本語も使いつつ行う（Bilingual CLIL）とした。過去いくつかの授業で、教師（筆者）がほぼ英語で指示や科目内容を講義した際には、学生が委縮する、指示の英語が理解できない学生が作業や活動に取り掛かることができない、時には取り組む気力をなくす、授業についてゆけない、という問題があった。（教師・学習者ともに）英語だけでなく時には日本語も使いつつ行う（Bilingual CLIL）ことで、授業運営がスムーズになる。活動の指示が理解できない学生が多数いるときには教師が日本語で補足する、一部しかいない場合は机間巡視の際に日本語で本人にのみ補足する、グループ活動の場合は、グループ内で教え合ってもらったようにした。また、授業ではたびたびペアや3人～5人のグループでの話し合いを行ったが、その際も「極力英語を使う、知らない単語、うまく英語で言えない場合は日本語を使ってもよい」と指示した。特に出来事の感想などを話す際の感情表現「なんとなくうっとうしかった」などは、高校まであまり習っていないと思われる。そこで、例えば“I felt なんとなんとうっとうしい。”のように、英語に日本語を交えて表現してよい、とした。その際も語順は守っているため、少なくとも文法の学習にはなっている。

②授業の方法：活動内容

語彙・文法も単に教師が説明するだけでなく、練習問題もテキストにあり、英語を用いながらそれらを学習するようになっていく。語彙も文脈の中で意味を考えたり、定義と語をマッチさせたり、といった練習問題なので、日本語での練習問題に比べて英語に触れる機会が多い。できれば英語で考えてほしい。学習者の頭の中まではこちらは見えないが、英語での練習問題を多く重ねることで、「英語→日本語→英語」

という、一度日本語に訳して考える習慣から、次第に「英語→英語」というように、英語を英語のまま考えるというチャンネルが育つことを期待した。

リスニングは短い会話を聴く活動、やや長い会話やトークを聴く、ビデオを視聴する機会がある。長い題材の場合にはスクリプトプリントを配布したが、なるべく1回目はプリントを見ずに聴く・視聴するよう指示した。これは、学習者のこれまでの英語力によっては、「ほとんど聴き取れない」ケースも考えられ、学習意欲を失ってしまう可能性があるため、それを防ぐためである。

リーディングはやや長い題材が多いが、語彙・文法が平易であり、理解に支障はない。また、長い題材には音源もついているので、一度黙読させてから音源を聴かせたり、音源を聴きながら黙読させたりした。

会話は、会話練習コーナーだけでなく、写真や文章についての感想、自分の地域や文化での例を出し合う、など、ペアやグループ活動を多く取り入れた。

③成績評価方法

成績判定材料・配分等は以下の通り。

「毎授業回に前回の復習小テスト（語彙、文法、読解、リスニング等） 5点×12回 60点（60%）、プレゼンテーション（または英作文）オンライン投稿 30点（30%）、ピアレビュー 5点（5%）、ミニレポート（この授業で新たに学んだことまたは自分で調べた内容）5点（5%）を総合的に判定する。小テストで点数が確保できた場合も、プレゼン未提出は単位修得放棄とみなすので注意。」

- ・プレゼン（または英作文）のテーマは、Unit1～5（6）の、主に作文課題（*healthy food/diet, city life, challenging experience* などについて、あるいは自分で設定のテーマ、から1つ選択。推奨は論述型だが、説明・エッセイタイプでもよい。

- ・プレゼンは授業補助システム Moodle 上の「フォーラム」に掲載して公開する。互いに見合う形。希望者は授業内で発表。

- ・ピアレビューは勉強のため3人以上にすると良いが、点数にするのは1人分（5点）。

到達目標が主に「なるべく日本語を介さず英語を英語のまま理解すること」と、「（基本的な語彙・文法等でよいので）情報や意見を英語で書く・話すなどして伝える」ことであるので、語彙文法の暗記を問うような、1回だけの「学期末試験」はそぐわないため、復習小テストとプレゼンテーション等、活動による評価とした。ただし、「参加度合い」は判定材料としなかった。個人の英語レベルや性格によって、ペアやグループでの話し合い活動は参加度に差が出るためである。

4. 結果と考察

4.1 授業担当者による観察から

まず、全般的に学生の参加意欲が高かった。教師が解説する場面もある程度あるが、その際も顔を上げて集中して聞いていた。特に、ペアやグループでの活動を活発に行

った。会話コーナーだけでなく、簡単な練習問題の解答確認や、テキストの写真を見て・リスニングやリーディングの話題を踏まえて自分たちの地域での話などをさせたが、活発に話し合っていた。この学年はコロナ禍で1年次はほとんど登校できず、オンラインでの授業受講だった。また、2022年度は原則対面授業に戻ったものの、大学の校舎改修により教室が不足する関係で、大人数の授業ではオンラインとなっているものもいくつかあった。したがって、友人作りがやっと今年度にできたとはいうものの、まだコミュニケーション不足であることも、英語の授業時に大変活発に嬉しそうに会話する要因となっていたかもしれない。

語彙・文法・リーディングは平易なため、理解に困難を感じる学生はほとんどいなかった。練習問題も英語で、英語に触れる機会が多いので、特に平易な項目については日本語を介さず英語を英語のまま理解していたのではないかと推察される。(が、確認はできていない。) 今後も訓練を続けて、英語を英語のまま理解するというチャンネルが育つことを期待したい。

リスニングでは、短い会話は支障なく内容を把握することができていた。やや長く速い会話・トーク、ビデオの長い説明・やや速いトークについては、「すべての語句を聴き取れる必要はない、何の話題か、話の概要をつかむ程度でよい」として、学習意欲が削がれないようにしたので、特にビデオは映像を楽しみながら視聴してくれていた。細部まで聴きとれることよりも、英語を聴く、英語での映像を視聴することに慣れること、英語に対する心理的ハードルを下げることができれば十分と考える。興味を持った学生はスクリプトプリントで後日自習できる。また、このテキストには学生が復習に利用できるオンライン教材サービスがあり、音声やビデオ、練習問題などが用意されているので、学習を継続、発展することができる。

4.2 「ミニレポート」から

この授業では「この授業で新たに学んだことまたは自分で調べた内容」についての、短く簡単な「ミニレポート」も5点枠(5%)で課した。受講生が教育学部の学生であること(専攻分野はさまざまで、英語専攻は2名)から、授業を受動的に受講するのではなく、ぜひ積極的に調べたり考えたりしてほしいと思い、入れた課題である。語彙や文法については高校までの既習事項がほとんどであるため、「再認識」でもよいとした。取り上げる項目は語彙、文法、発音、リスニング、スピーキング、読解、文化や社会、その他、と、何でもよいとしていた。

その結果、学生が取り上げた項目がリスニング以外、多岐にわたった。

表1 選んだテーマ 集計と内訳

項目	総数	内訳
文化・社会	11	絶滅危機にある言語4、パレオダイエット・健康3 マナーやスモールトークの違い2

		コミュニケーションの違い・空気を読むなど 1 都市や街の悩み・改善努力 1、世界の面白い建物 1
語彙・表現	6	具体例 4、「重要さ再認識」 2
発音	5	具体例 4 音の連結、「重要さ再認識」 1
文法	3	具体例 2、「重要さ再認識」 1
会話・コミュニケーション	3	コミュニケーションの大切さ・面白さを実感 1、話すには文法が重要 1、話す際難しい文法より「伝えたい」気持ちが重要 1
リスニング	0	
その他	1	語用論について調べた 1

注：人数の多い順に整理。具体的記述があまりないものは「重要さ再認識」とした。

このように、英語自体については語彙・表現、発音について取り上げた者が多く、ついで、文法、会話・コミュニケーションだった。それらの倍近い人数が、文化・社会という、学習した（科目）内容に関心を持ち、意見・感想を述べたり、さらに調べたりしていた。他の項目のレポートに比べ、文化・社会について書いた学生は記述が多く、関心の高さがうかがえる。筆者の予想では、高校までも学習していた「文法」や、おそらく今回の授業で初めてじっくり学習したと思われる「リスニング」や「発音」についてのミニレポートが多いだろうと考えていたが、テキストの「内容」についてのものが最多であったのは、意外であった。それだけ話題が学生にマッチし、興味関心を引いたようである。

4.3 「授業評価アンケート」から

大学による授業アンケート（2022年度前期金曜3限「英語B3」）から、授業の効果を考察する。ただし、回答が6名と少なく、統計的な意味はないので、自由記述（4名）のみを記載する。

〈自由記述〉

- ・英語の基礎的知識に加え、文化や歴史的背景についても学ぶことができ充実した学習ができました。テストではなくプレゼンで評価していただけることで、知識だけでなく、思考・表現力も身につけることができ、梅田先生の授業をとって本当に良かったです。後期もとりたいと考えています！明るく楽しい授業をありがとうございました。
- ・このテキストを活用しようという判断がとてもよいと感じた。毎回の単元で扱われている題材がとても興味深かったし、それについて横の人と話し合うのは知識も広がってよかったなと個人的に感じたので、ペアで話し合う時間は今後も十分に提供してほしいと思う。さらに、先生の海外旅行の経験談も、海外に行ったことがない私にとっては、文化の違い等がとても新鮮で興味深かった。最終課題のパワーポイントづくりとその交流は、とても身になったと思う。自分の英語力を発揮する場になり、他の生徒

のスライドを見て学ぶこともあった。

・授業中、先生が英語で話してくださっていたので、勉強になった。授業の内容だけではなく、先生の経験のお話を聞くのが楽しかったです。 ・とても楽しかったです。

このように、アンケートの回答者は4名と少なかったが、そのうちの2名は記述量が多く、授業が彼らの興味をひいたこと、また、英語スキルだけでなく、「協学」を体験し、また、他者の知識や考えにも興味を持つことができたようである。

4.2「ミニレポート」、4.3「大学アンケート」の結果を総合すると、学生が英語自体だけでなく、授業で扱った話題にも高い関心を持ったことが分かる。「4つのC」のうちの「内容」について、よく考えて構成されているテキストにより、健康と食事、言語、職業、といったいろいろな、興味深い「内容」に触れることができ、学生の興味がさらに高まったと思われる。

一見、そのことは英語スキル自体の成長に関係ないように思えるかもしれないが、関心のあることを英文で読む、英語による説明の動画を見ることで学んでいたのである。「4つのC」のうちの「言語」について、英語という「学習の言語」(目標言語)を、読解や動画、リスニング、多少日本語交じりでも良いというルールでペアやグループで会話・議論することで、「学習のための言語」を通じて学習した。

また、自分で調べたことや考えたことをまとめてプレゼンテーションを行うことで、「学習を通しての言語」も練習することができた。

「4つのC」のうちの「思考」については、毎回の小テストに備えて、基本語彙や文法の「記憶」、テキストの文章やリスニングの「理解」、テキストにある語彙や文章をヒントにして自分で英語を書く、話す、などの「応用」、さらに、ペアやグループでの議論や、英作文では「テキストの話題を理解したうえで、自分の意見を構築する」という、「分析」「評価」も行うことができた。さらに、学期のまとめとしてプレゼンテーションを作成するという「創造」も訓練できたと考える。

「4つのC」のうちの「協学」については、授業アンケートの記述に見られたように、ペアやグループでの議論を通して、他者の考えを知ることを体験し、また、その重要性も認識していただけたことがうかがえる。

学生の反応から、特に取り上げる教材の「話題」が授業の大きなキーとなるので、文化や価値観、健康、自己成長のヒントなど、幅広い内容を扱うこと、また、地球の環境問題や食の問題など、現代の問題を取り上げることも重要であることが分かった。

4.4 教師の授業に対する心境の変化

さらに、Sasajima (2013)が指摘しているように、CLILに基づいた教育を行うことで、教師のマインドセットも変化する。笹島氏と5人の英語ネイティブ・スピーカー教師が3年間CLIL授業を試みた時点での報告によると、特に「活動を内容と協同に重点を置くように変わった」「言語使用は内容や意味、学生同士の活動を促すために用いる」「教師は単に教えるのではなく、学生とともに学ぶことを楽しむようになった」「学生と

教師の関係が少しずつ変化した」といった変化があったとのことである。(Sasajima, 2013:63-65,筆者による抜粋要約と訳。)

筆者も、学生がペアやグループで楽しそうに活発に話す姿を見るのは、コロナ禍でオンライン授業時期が長かった後ということもあり、本当に新鮮で、嬉しく、楽しい気持ちになった。また、学生から新しい話題や知識を得て、それをクラスでシェアすることもあり、勉強にもなった。教師は単に知識を与えて「暗記」させる、機械のような存在ではなく、チューターやファシリテーターとして、学生の自発的な「学び」を高める存在であるべきだということ、**“Weak”**ではあるが CLIL 授業経験を通じて、認識を新たにした。

5. まとめ

以上見て来たように、CLIL に基づいた教育は日本の英語教育において有効であると考える。ただし、例えば物理の授業内容を英語で教えるといった、**Hard CLIL** を教育機関全般にわたって導入することは難しいだろう。カリキュラムの一部、や授業の一部で導入する **Weak CLIL** であれば導入しやすい。CLIL を行うことで学習者が他科目に興味を持つ、異文化に興味を持つ、学習意欲が高まる、ターゲット言語（本稿の実践例では英語）についても意識する、内容発信のためターゲット言語を用いたい意欲が高まる、等の有効性が見られた。また、教師の、教育についての意識改革ともなる。このように、学習者・指導者双方にとって **Weak CLIL** の導入は効果的である。

注

1. 関沢(2010)が、2009年7月発表の総務省「情報流通インデックス研究会」の報告書内容を挙げている。

「電話、インターネット、放送、郵便、印刷出版、CD・ビデオゲーム・ゲームソフトの6種類の「流通情報量」(私たちの手元に届いた情報量)は、2001年に比べ、2007年は「平均1.6倍」の伸び率。そのうち、インターネットは35.7倍の伸び率。しかし、インターネットについて、実際に私たちが情報を認知している(受け止めて実際見た)

「消費情報量」は2001年に比べ、2007年は1.9倍だったとのこと。2倍近くインターネットにアクセスする量は増えているが、「流通情報量」は35.7倍なので、「この差が、**情報洪水**となって私たちに押し寄せている」関沢(2010、3-4「はじめに」、強調関沢)

2. 筆者はこの授業以前に、和歌山大学に着任した2020年度から Oxford university Press “American English File”シリーズも使用しており、こちらも同様のよくできた授業用プレゼンツールがある。洋書テキストは教師側の便宜もよく考えて作られている。学生用テキスト(オンライン練習込み)が3500円程度、教師用プレゼンツールやガイドブックが5~6000円程度、と日本の大学英語テキストに比べてやや高いが、学生用はオンライン練習込みであること、学生の興味を引く美しい写真や楽しいイラストが多いこ

と、多色刷りであること、を考えると、法外に高いわけではない。また、教師用ツールは、学生にとっての分かりやすさ、教師が節約できる時間と労力を考えると、決して高くはない額であると感じる。

参考文献

Coyle, D., P. Hood & D. Marsh (2010) *CLIL: Content and language integrated learning*. Cambridge: Cambridge University Press.

江利川春雄 (2022) 『英語教育論争史』. 講談社選書メチエ. 講談社.

Gabillon Z. & Ailincăi R. (2015) Content and Language Integrated Learning: In Search of a Coherent Conceptual Framework. (Conference Proceedings) Conference: European Conference on Language Learning (ECLL), Brighton, UK (ISSN: 2188-112x) At: Brighton, UK. DOI: 10.13140/RG.2.1.4027.6963. Retrieved from: <https://www.researchgate.net/publication/281748280> [Accessed 14 January 2022]

Ikeda M. (2013) Does CLIL Work for Japanese Secondary School Students? Potential for the 'Weak' Version of CLIL. *International CLIL Research Journal* 2 (1). Retrieved from: [Contents - Vol 2 \(1\) 2013 - International CLIL Research Journal \(icrj.eu\)](#) [Accessed 14 January 2022]

池田真、渡部良典、和泉伸一 (2016) 『CLIL (内容言語統合型学習): 上智大学外国語教育の新たな挑戦—第3巻 授業と教材』. 上智大学出版

和泉伸一 (2016) 『フォーカス・オン・フォームと CLIL の英語授業』. アルク選書シリーズ. アルク.

和泉伸一、池田真、渡部良典 (2012) 『CLIL (内容言語統合型学習): 上智大学外国語教育の新たな挑戦—第2巻 実践と応用』. 上智大学出版

Sasajima S. (2013) How CLIL Can Impact on EFL Teachers' Mindsets about Teaching and Learning: An Exploratory Study on Teacher Cognition. *International CLIL Research Journal* 2 (1). Retrieved from: [Contents - Vol 2 \(1\) 2013 - International CLIL Research Journal \(icrj.eu\)](#) [Accessed 14 January 2022]

関沢英彦 (2010) 『いまどきネットだけじゃ、隣と同じ! 「調べる力」』. 明日香出版社

渡部良典、池田真、和泉伸一 (2011) 『CLIL (内容言語統合型学習): 上智大学外国語教育の新たな挑戦—第1巻 原理と方法』. 上智大学出版

Yamano Y. (2013) CLIL in a Japanese Primary School: Exploring the Potential of CLIL in a Japanese EFL Context.

International CLIL Research Journal 2 (1). Retrieved from: [Contents - Vol 2 \(1\) 2013 - International CLIL Research Journal \(icrj.eu\)](#) [Accessed 14 January 2022]